

御山のひとりに深き花の闇

藤原 新也

瀬戸内寂聴さんせとうちくちろうに初めてお会いしたのは一九八九年のことです。

学習研究社が主催したフェミナ賞という文学賞がその年に立ち上がって、審査員として僕に声が掛かったんです。この賞は応募者が女性のみに限られる賞で、審査員は瀬戸内寂聴さん、大庭みな子さん、田辺聖子さんたなべせいこという女性の作家たち。そこに一人、皆さんより歳の若い僕が参加するという奇妙な審査員構成だった。編集長も星さんという女性の方で、そんな中に僕が呼ばれたのは審査員長の役割の大庭みな子さんの強い推薦があったからだとのちに聞きました。

最初の審査は料亭で行われたんだけど、そこで初めてお会いした寂聴さんは丸い小ぶりのブルーのサングラスをかけておられた。それが紺色の袈裟けさと似合っていて、お坊さんなのに妙に色っぽいんですね。

三人の作家が女性で僕が一人男性ということで、どうなることか怖いもの見たさのようなものもあったんだけど、皆さん非常に気遣ってくれて賞の審査は和やかな雰囲気

気でした。

しかしあるとき審査の席で驚くようなことがあった。選考会の途中、部屋の襖がスツと開いて編集者が膝をついて入ってくると「ただいま開高健（かいこうけん）さんがお亡くなりになりました」という報告があった。

その瞬間、寂聴さんが、

「ああ、それはよかったわね」

と一声を発したんです。

皆さんはその言葉に黙っておられた。いったいこれはどういう意味だろうと。人が死んだことに対して「よかったわね」という意味が僕には掴めず、黙した部屋の中で思いを巡らせたけれど、その言葉の真意に至ることはできませんでした。

その開高さんには僕もお会いしたことがあって、そのときに感じたのは小説やノンフィクションに描かれている作家像とは異なり、繊細ですごく気の小さな人だという意外さでした。それに何か業のようなものをお持ちになっていると思った。寂聴さんが「よかったわね」と言ったのは、大きな業をずっと背負ってきた方が亡くなってやっとその肩の荷を下ろした、それはよかったという意味だったのではないかとのちに解りました。

寂聴さんとはそんな衝撃的な出来事以降交流が始まり、京都へ僕が行ったり、寂聴さんが東京に出てこられたときには一緒に会食する関係が三十年以上続いたんです。

寂聴さんはお坊さんでありながら朝っぱらからステーキを食べることで有名な肉好きでね。京都ではすっぽんの専門店によく連れて行ってもらったんだけど、その店はお座敷の真ん中に火起こしがあって、そこへ置かれるお鍋の中は出汁とすっぽんだけ。あとの具材は何にも入れないんです。ただ肉をひたすら食べて、食べている間にじわじわ肉の味が染み込んでくるような、副菜が一切ないことによって肉の食感や味が際立つといういかにも京都ならではの席でした。

それから料亭にご一緒したときは、上座敷に芸者さんと呼んで笛を聴いた後、お座敷で食事するのではなく、階段を下りて台所の横にある庶民的な四畳半の部屋へ行くんです。そこへ台所で作った総菜やお酒が運ばれてくる。一見、客のもてなしとしてはぞんざいに見えるんだけど、京都の芸者があがるような料亭では、一番の上客は上座敷じゃなくて台所の横の小さな部屋で食事をするんですね。

これは、もてなす側がすべて気を許していて、もてなされる側もすべて気持ちをほどこいているという意味がある、いかにも京都市のなしきたりというか。あの台所横の小さな部屋で総菜を食べたのは、寂聴さんがいたからこそ最上のお客になれたということだったと、後から気がつきましたね。

それから四国各地や広島島の賀茂など日本のあちこちを一緒に旅しました。たとえば岩手県の天台寺を訪れた際、ここは寂聴さんが住職を兼務されていた古く素晴らしい

名利なんだけど、大変驚く光景を目にしたんです。辺鄙な山の中にあるお寺にもかかわらず、そこに地元や地方からおよそ五千人の方が寂聴さんの法話を聞きに駆けつけて、広場や丘の上の方まで聴衆が溢れかえっていた。

この瀬戸内寂聴さんという方は、五千人を相手に話ができる人なんです。せいぜい僕ができるとしたら百人ほどだと思う。五千人の人たちを引きつける話をするのはもう大変な力が必要です。寂聴さんが演壇に上って例のお寺の梵鐘を鳴らすような声で「みんな、よくいらっしやっただわね！」と第一声を上げると、それだけでみんなの気持ちがあつくと湧き立ち、聴衆に意識のさざ波が立つんです。僕はそのとき彼女の演壇の横にいたのですが、これは話というより気配りだなと思った。みんなに気を配って、自分の心をも配っていらっしやる。つまり優しさなんです。だから五千人もの人が心を開いている。その気配りで言うとき面白いことがあった。

法話が質疑応答に入ると、マイクを渡されたある女性がこう言ったんです。

「寂聴さん聞いてください、私は今六十歳になるんですが、私の主人は実に三十年間もよそに女を作っていたんです。それが最近発覚して、自分はこんな人生を送っていたのかと思うと本当に情けなくて、この先一体どうしたらいいでしょうか」

すると寂聴さんは、「ああ、それはよかつたわね」と、開高健さんがお亡くなりになったあのとさと同じ言葉を口にしたんです。聴衆のみんなはあつげにとられたように静まりかえる。すると寂聴さんは続けてこう言った。

「三十年間も愛人がいることを悟られないという、この努力は大変なことよ。ご主人はあなたのことを思っているからこそあなたを捨てずに三十年間悟られないように大変な努力をしてきたのよ。それもあなたに対する一つの愛情の表れなんです。その大変な努力をお認めして許してあげること、旦那さんも愛人の方もあなたも全部救われるんです」と。

すると、この意外な答えに五千人の聴衆が、わあっと湧き立つように笑う。五千人の笑いというのはすごいものでね。その笑いに包まれると、ある意味で三十年愛人を作ってきた主人を恨むことが妙に煩惱のように聞こえてくるんです。男女問題というのはほとんど解決不能なんだけど、そういう解決の方法があるのかとその笑いの輪に僕も加わりました。

それから二時間ほどの法話を終えて、演壇を下りて控え室へ歩いていくとき、ある瞬間があった。僕の前を行く寂聴さんがよろめいたんです。足が悪いわけではなく、そのとき思ったのは放心でした。五千人を相手に気配りをし人々の心に入りこむというものはものすごいエネルギーを使うわけです。彼女はひよろつとよろめいて、少し歩いてから、またよろめいた。そして体を立て直して控え室に入って行かれた。命を削っているなと思いました。そういう命を削るようなエネルギーに満ちた説法というのは、一般にはあまりないことですね。

そんな寂聴さんが銀座に來られて食事をして、お別れの挨拶で一瞬ハグをしたとき、力がちよつと落ちてゐるなと感じたことがあります。いつものように軽くハグをしたのですが、そのハグだけで生命力というものは感じられるんですね。生命力が落ちているなど、後ろ姿を見ながらかなり心配になった。

それから一週間後、寂聴さんが倒れたと連絡があつて、ああやつぱりと思ひました。僕はそこで寂聴さんに屏風を送ることにしたんです。「死ぬな生きろ」と力を込めて筆で書いた屏風をお送りし、寂聴さんはそれをベッドのわきに置いてくださった。書のエネルギーが功を奏したのかどうかは定かじゃないが彼女はその後回復されて、またいつものように健啖家になつて法話も再開されました。命のエネルギーを他者に向かつて与える彼女には、そういう生命の危機がこの十年で何度かあつただけで、そのたびに生氣を取り戻されて、この人は不死身だなと思ひましたね。

だが三回目にお倒れになつたときは、ちよつと深刻でした。寂聴さんと付き合ひのある「SWITCH」という雑誌の編集長の新井敏記君（あらい としゆり）がお見舞いに行きませんかと言つたんです。彼は京都から帰つてきて寂聴さんの写真を見せてくれた。憔悴してやつれてゐた。そのとき、僕は行かないと言ひました。

お年を召されていても寂聴さんは女性です。そういう生命力の落ちた顔色の悪い姿を男性に晒したくないという気持ちも当然あるわけです。それでその場の思ひつきで、行かない代わりに今から言葉を書くからそれを持つて行つてくれないかと彼に頼みま

した。

墨をおろし筆をとって、ちょうど手元にあったハガキ大の折帖せつじょうに即興で書をしたためました。

人は

手折れ

足折れ

滅入り

しおれ

悲しみ

不安を抱え

苦にさいなまれ

ゆらぎ

くじけ

うなだれ

よろめき

めげ

悲しみ

涙し

孤独に締め付けられ

心忘れ

心折れ

打ちひしがれ

うろたえ

奈落の底に落ち

夢失い

それでも

生き

生き

生きている

思いのままに浮かんだ言葉を早書きで書いて、寂聴さんのもとへ持って行ってもらった。

病気の方に接したときに頑張れとか、お大事にしてくださいとか、前向きな言葉はある意味で禁物なんです。逆にそれがプレッシャーになることもある。突き落とすと言ったらおかしいけれど、そのすべての悲しみと苦しみ、マイナスの気持ちを全部

受け入れ、その最後に、やっぱりそれでもまだ生きているじゃないか、呼吸をしているじゃないかと伝えたかった。

僕はその場にいなかったけど、寂聴さんがそれをベッドの上で読まれたとき、涙が光るのが見えたと届けた彼は言っていた。寂聴さんの涙なんて僕も見たいし、見た人は後にも先にもいないんじゃないかな。その後、どうにか彼女は回復されて、また元の寂聴さんに戻られた。

それで、この人はもう死なないなと思ってね。「寂聴さん、死ぬときはちゃんとその前に僕に言つてよ」と冗談を発したりもして。

そういう形で三十年以上の付き合いが続いた寂聴さんは、二〇二一年の十一月に、突然あの世に行かれました。

寂聴さんとは月にだいたい一度か二度ほど気の向いたときに電話をしていたんだけど、僕がふと寂聴さんに電話しようかと思つてかけると、ほとんど必ず「今あなたのことを秘書と話してたのよ」とか「ちょうど電話しようかと思つていたんですよ」とおっしゃるんです。おそらく寂聴さんは念が強い方なんだと思う。ある人のことをふと思ひ浮かべたときに念がその人へ通じていくようなところがあつて、お電話しようかなと思つたときは寂聴さんも僕の方に気が向いているということが、ごく普通にあつたんですね。

最後にお話しした日も、なぜかふと電話したいなという気持ちがある中に湧いてきた。その当時、寂聴さんの調子が悪くて書き物が進んでいないと聞いていました。寂聴さんにとって書くことは命そのものだから、筆が進まないというのは、これはかなり危ないと感じたのね。

その寂聴さんのことを客観的に尋ねるために、寂聴さんの携帯ではなく、秘書のまなほさんに電話をしたんです。するとまなほさんは「今ここにいますよ、代わりましょうか？」と寂聴さんと電話を代わってくれました。そこで初めて彼女が病院のベッドにいたことを知りました。あまり長く話すのは体の負担だろうと思って五分ほどの会話をして、彼女の声は元気だったけど、いつもとは違う影みたいなものを感じてね。長い間いろんな声を聞いているから、大体声で体の調子がわかるんです。

いまだに思うんだけど、寂聴さんは自分の体が悪くても人の体を心配する包容力のある方だったんです。僕が以前化学物質にやられたことが彼女の頭にいつも残っていて、その短い通話の中でも「藤原さん、お体の調子はどうなの」と訊いてくるんです。自分のことより人のことを慮るところは、病に伏せているそのときの状況でも変わらなかつた。その電話では「今日退院するんです」と寂聴さんもまなほさんも明るく振る舞っていたから、退院されるならよかつたと思っていた。

だけどそれから三日後に寂聴さんはお亡くなりになりました。誰も苦しめずに息をひきとる、見事な死でした。

お亡くなりになる三日前に電話を繋いでくれた秘書のまなほさんには非常に感謝していいね。彼女の心遣いがあったからこそ、最後の最後のお言葉を聞くことができた。死に際した状態でありながら「藤原さんお元気？」と言っていたその声がいまだに耳に残っています。

そんなお付き合いがあったから、雑誌や新聞やテレビ等で寂聴さんの訃報に際してコメントを求められたんだけど、僕は人の死に際してのコメントなんて吐く気がなくて、テレビなどでいろんな人が得意げにコメントを吐いていたり、寂聴さんのニュースが出てきたりすると消していました。

その代わりに天台寺へ行きました。あの五千人の人の波があった天台寺です。法話を聞いたときはちょうど花の季節だったから、天台寺は花のある世界というイメージが僕にはあったんですね。寂聴さんがお亡くなりになってここにお墓を持たれることが決まったので、まず供養を兼ねて天台寺に行こうと。

新幹線で東京から二戸にへに行つて、そこから車で山の方に登つて行つた。今回は真冬近くに行くということはどういう風景が展開しているのかなと思つてみると、これが行つたときと百八十度違う、寂しい世界になっていた。

ちようど曇りでみぞれが降りはじめたりして、その翌日には吹雪が吹いてきたんですね。土日だったんだけど、その天台寺にはほとんど人がいない。午後にはぽつんぽ

つんと家族連れとすれ違う程度で。十年前の山の中で見た壮然たる命あふれる世界の面影はまったくなくて、ある意味で死に絶えた世界みたいな風景が広がっていて、これがあのときの天台寺かと。

寂聴さんは紫陽花のお花が好きで、この天台寺の境内だとかあちこちの道端に何千株という紫陽花を植えられていました。その紫陽花の季節は壮観らしいんだけども、そのときは焦げ茶色の枯れた紫陽花になっていてね。この静けさというか、しんみりした感じはなんだろうと、そういう風を感じたわけです。

瀬戸内寂聴という巨星があのお世に行ったことで、ここまでお寺の空気が一変してしまうのかと。この天台寺に限らず、その周辺の温泉施設とかそういうところも寂聴さんの写真が飾られていたりしたから、その周辺まで寂聴さんのまとう空気の影響が及ぼされていたんだけど、一人の人間がこの世を去ったことで、そのよすがであった景色、周辺の建物、人の風景まで、潮が引くような静けさになっていました。

寂聴さんは僕と会ったとき、よく死の話をしていましたね。人間は自分がいつ死ぬかわからないものだから、知らないことによって逆に猶予を与えられているという、微妙な生と死の関係というものもお話しされていた。その中で、死ぬときはどういう風に死ぬのがいいかと話したことがあります。すると寂聴さんは座敷で飯食つてるときにうしろの襖を指差して「あの襖をスツと開けてそのまま襖の向こうの暗がり消えていくような死に方っていいわね」とおっしゃった。襖を開けて見ても誰もい

ない、行方不明というかな。それもロマンというか、人間死して自分の姿を隠すのも一つの死の極致かなとそのとき僕は思った。

というのは人間は自らの死の姿を周りのすべての者に晒してしまおうでしょう。これは動物の中では特異な死に方で、野生動物は自分の屍をなるべく晒さないというのが一つの死の姿なんです。たとえばインドであれ、アフリカであれ、日本の田舎でも、海でも山でもそうなんだけど、空を見れば鳥がたくさん飛んでいる。それから昨今であれば鹿、イノシシ、猿、いろんな動物が行き交っているんだけど、あれだけいる動物がほとんど死体を見せない。

仮に自分の飼っている猫がまだ野性味を残しているとすれば、死ぬときでも、すつと姿を消して行方不明になることがあるわけですね。これが本来の動物の死の姿で、人間だけが衆目に自分の死体を晒す奇妙な動物だと僕は思っている。野生動物がなぜ自分の死体を天下に晒さないかという点、この謎はなかなか解き難いんだけど、あるとき僕が房総の方で餌をやっていた野良猫が急に姿を消したことがありました。それから一ヶ月ぐらいして、山の手の方の水道にコンクリートの蓋があるんだけど、枯れ葉だとかが詰まりはじめていたものだから掃除しようとして、蓋を剥がしてゴミを取っていたんですね。そしたら水道の中ほどの蓋を開けると、その猫のひからびかけた死体があった。これを見たとき、動物が自分の死体を隠すのは防衛本能の表れなんだなと思いました。死ぬ前は徐々に体が弱っていくわけで、野生動物は弱肉強食の

中に住んでいるから、敵から襲われる。そういうことが体でわかるんでしょう。それで物陰に自分の体を隠す、その猫のようにね。

あのまま水道の蓋を開けなければ永遠に行方不明になってしまっていた。そういう動物の死体がおそらく人間の目に触れない形であちこちにたくさんあるわけですね。同じようにアフリカでも象が死ぬときに身を隠す洞穴があつて、そこには象の骨が散らばっていると。人はそれを象の墓場と言うけれど、逆に言えばあのような巨体を隠せる場所は限られているから墓のように見えるということでしょう。

そういう意味で寂聴さんが言った、行方不明になりたいわね、というのはある意味で、動物の死の姿みたいなのをどこかに想定されているような感じがあつて、ああそれもいいね、なんて言ったんだけど。

もう一つ、人間と他の動物の違いは、自分がいつか死ぬと知っていることです。死ぬことを知っているからこそ、どういう死に方をしたいか、どういう死に方はしたくないかという、迷いや理想のような考えが生じるわけです。行方不明も一つの死の姿であるし、昔のチベットの坊さんのように即身成仏と言って、洞穴の中に入って死をずっと待つ姿もあるわけですが、それは人間が自らの死を知っているから行えることです。

僕個人は、どういう形で死を迎えるのが一番いいのかとかつては考えたことがあつたんだけど、最近、死の理想を語るべきではない、という心境かな。

というのは、百人百様というか、人って様々な死に方があるでしょう。癌で苦しんで死ぬ人もいるし、事故死や孤独死もあるだろうし、九十九歳で逝った僕の父のようにスーッと息絶える人もいて様々な死の姿があるわけで、一つの理想の死を語るということはそれ以外の死を否定してしまうことになります。僕の兄貴が五十九歳で癌で亡くなったときには、ものすごい苦しみの中で死んだ。じゃあその苦しみの死というものを、当然苦しまない方がいいんだけども、それを否定してしまうと、自分の兄貴の死そのものも否定するようなことになってしまう。

それから僕の知り合いに孤独死した人がいて、杉並オウギナミの公団のマンションに住んでおられて何かあったときには僕に連絡が来るような形にしてたから、その公団の方から連絡が入ったんですね。Aさんが亡くなりまして身元引受人がいないと。孤独死というのは壮絶なもので、マンションの六階だったけど、行ってみるとエレベーターで上って四階、五階あたりからエレベーターの中まで臭気が漂ってくるんですね。エレベーターを降りるとその六階中に腐敗臭がワーツと立ちこめている。孤独死ですつとそのままになっていたら、腐乱した死体になってしまった。今はそれですら一つの死として受け入れるべきだろうという考えが僕にあります。そういう意味で寂聴さんと話していた、どういう死に方がいいかという話も、今の僕の中にはもう消えています。

それで寂聴さんの場合はゆかりのある天台寺に自分の遺骨を埋めたんだけど、た

だ、なぜ天台寺だったのかなと。従前に行ったときは華やかさを感じただけで、冬の東北の重く底冷えするようなあの世界に自分の骨を埋めようという寂聴さんのお心は、どうも今ひとつ掴みづらいというか。

というのは寂聴さんは京都の嵐山あらしやまに何十年と、寂庵じやくあんという庵を持って生活されていて、ご出身地が徳島だからそっちにも別宅があったりして、京都か故郷に骨を埋めるのが一番決着の仕方としてありえそうなんだけでも、両方ともお選びにならなかった。

これは何でだろうと。今回訪れた天台寺の深閑として寂れた、ずんと寒い東北のあの空気の中で、なんで寂聴さんはここに骨を埋めようと思ったのかなあと、ずつと謎のまま新幹線に乗って帰ってきたんですね。

ふと思ったのは、ひよつとすると、寂聴さんは京都人とは馬が合わなかったのかなと。何十年も住んでいても、やっぱり京都人っていうのは生粋の京都人と京都以外から来た人への峻別をものすごく持っていてですね。妙なプライドがあったりして、おそらくあれだけ著名な方でありながらも京都に溶け込めない何かがあったんじゃないかと、これは僕の推測なんだけども。

それから故郷の徳島になぜ帰らなかったのか。これは一つ分かりやすいというか。徳島はやっぱり保守的なところで、寂聴さんはあそこで結婚されたんだけど、不倫っていうか、男性を作って主人と子供を捨てたわけでしょう。だから徳島県人の寂

聴さんの見方では、常軌を逸して不倫をした家族を顧みない人だというレッテルを貼られているんですね。僕も徳島の友人がいるんだけど、やっぱり寂聴さんに少し否定的な感覚を持っている。徳島って行ってみるとからっとした感じなんだけど、どこかそういう村社会的な重さがある、だからあれだけ派手な阿波踊りが生まれたのかもしれない。それと彼女は旦那と別れお子さんも一緒にいてはいらっしやらなかった。

そういう意味で寂聴さんが最後に行方不明にならず、まあ行方不明になり得ないんだけど、故郷の徳島でもなく、長年住んでおられた京都でもなく、一介の住職として身を置いた東北の山間に身を寄せるといってお姿は、そのどこかに彼女の思いがあるんだろうなと。

あれだけ人を愛して、たくさんの人に会って生き、快活で、常に笑いの中に人を巻き込むようなお方だったんだけど、どこかにやっぱり深い孤独というものがあつたんじゃないかなと。そういう思いを抱きながら天台寺からの帰りの車窓の風景を見ていたんです。

そのときにふと思ったのは、寂聴さんが晩年にお出しになった句集の一つの句でした。

「御山のひとりに深き花の闇」

東京で最後に会食したときに寂聴さんが今度の句集にこのような句がありますとお

書きになった。今考えるとあれが寂聴さんの辞世の句だったのかな。そこには寂聴さんの快活な大笑いとはまったく別の静けさと孤独が漂っているんですね。そういう究極の孤独の中におられるから、逆にガーッと人を笑いの渦に巻き込むような陽の世界がおありだったのかなと。あのとときの紫陽花が満開の天台寺で津波のように押し寄せてくる五千人の聴衆の笑い声を彼女こそが求めていたのではないかと、そういう風に思いましたね。

そしてもう一つふと思ったのは、離れられたお子さんは僕と同じ年なんです。だからひよっとしたら僕とそのお子さんを重ね合わせていたからこそ、電話のたびに体のことを心配するような慈愛に満ちた言葉をかけられたのかなと。これも一つのまぎれもない真実の愛の形だろうと、そのように思うわけです。

どのような死を理想とするのかではなく、愛というものの理想を求めないことによつて掬い出される関係もあるということ、そのことを寂聴さんの死によつて学んだような気がします。

出典 『メモメント・ヴィータ』（双葉社 二〇二五年五月刊）「闇に咲く花」より